

岡山・鹿田遺跡 しかた



(岡山南部)

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
鹿田遺跡は、弥生時代中期後半に始まる集落遺跡で、古代・中世では摂関家領「鹿田庄」との関連が強く指摘されている。また同庄関連とみられる木簡が、本遺跡の約五〇〇m東の新道

- 1 所在地 岡山市鹿田町二丁目
- 2 調査期間 一 第九次調査 一九九八年(平10) 十一月～一九九九年五月
二 第二一次調査 一九九九年八月～十二月
- 3 発掘機関 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 4 調査担当者 岩崎志保・小林青樹・喜田 敏・豊島直博・山本悦世・横田美香
- 5 遺跡の種類 集落跡(荘園関連)
- 6 遺跡の年代 弥生時代中期後半～近世

遺跡から出土している(本誌第二号)。本格的な発掘調査は一九八三年から始まり、今回報告の調査は第九・一一次調査にあたる。二度に分けて行なった医学部附属病院病棟建設に伴うもので、調査総面積は四七四八㎡である。両調査では、平安時代末から室町時代を中心とした集落を確認し、建物・井戸のほかに、木棺墓、大小の区画溝や池状遺構などを検出した。大形溝は近世まで継続するものが多い。その他には、弥生時代の水田関連遺構(畦畔・溝)も検出された。

今回報告する木簡は、第九次調査出土のものが二点と、第二一次調査出土のものが一点である。

一 第九次調査

木簡(1)は一辺二五m程度の方形を呈する池状遺構の底面から出土した。遺構の時期は、出土土師器の年代観から平安時代末(一二世紀末～一二世紀)と考えられる。(2)は、中世に属する井戸の掘形内に打ち込まれた状態で出土した。状況から井戸が埋没した後の所産であり、井戸の伴出遺物ではないと考えられる。また、その位置は、井戸を破壊して構築された幅六m程度の大形溝の東縁に一致し、さらに、東北側に居住域が広がることから、集落の角を意識して立てられた可能性が考えられる。同溝は、鎌倉時代後半～近世に属する。

二 第二一次調査

(1)は、調査区南端を東西方向に走る幅五m以上の大形溝の底面か

ら出土した。出土位置は、(2)に関連して述べた南北方向の大溝が、北側にとりつく交差点にあたる。東西方向の溝の時期は、遺物が少なく不明瞭であるが、室町時代～近世と判断され、底面付近は室町時代に含まれる可能性が考えられる。

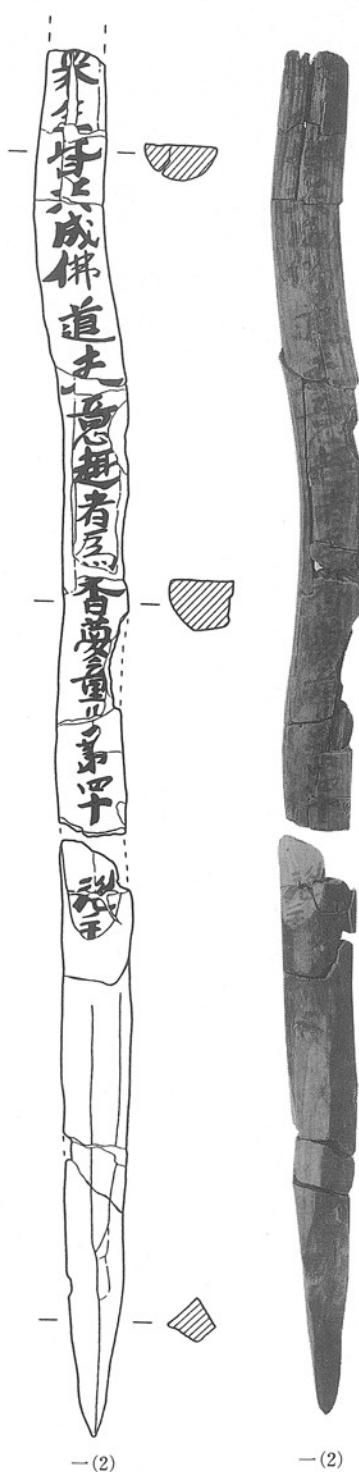
8 木簡の釈文・内容

一 第九次調査

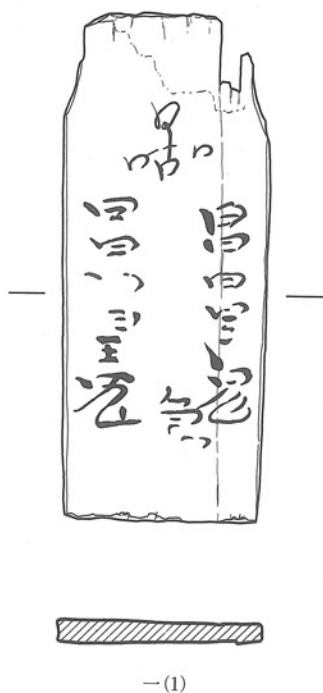
- (1) 「(符録) 鬼急々」
143×58×6 011

- (2) 衆生皆共成仏道夫意趣者為香夢童子第四十…施主」
(840)×40×35 061

(1)は墨跡の残存状況が悪く、赤外線テレビカメラ装置によってよ



一(1) (赤外線画像)



一(1)

うやく確認できる程度である。上端には道教の符籙を思わせる記号が記され、その下には二行で互いに形が類似した文字様のものが並び、なかに「鬼」と判読できるものがある。下部中央には「急々」とあるから、以下はおそらく「如律令」と続いたと思われる以上から呪符木簡と判断される。なお、下端断面は直線的になっており人為的に切断されたように見える。

(2)は香夢童子の供養を行ない、その功德をさらに衆生に及ぼし悉皆成仏をねがうという内容で、仏教的な供養碑のようなものか。杭状の丸太の面取りを行なって、そこにしっかりと筆致をしめす。ただ下端の「施主」は窮屈な記載となっている。書体からみると室町時代後半のものではないかとの印象をうける。

二 第一次調査

(1) ×正四年十一月十三日^[者カ]金阿禪門一百^{者也}

(425)×65×7 081

墨痕はほとんどなく、墨の部分がわずかに浮き上がっていることからかろうじて一部が判読できる。左側の一行は表面の摩耗もすみ判読できない。この木簡はしばらく野外にあったものと思われる。「正四年」は年号記載と思われるから、寛正四年(二四六三)、永正四年(一五〇七)、天正四年(一五七六)のいずれかに推測される。

書風や出土状況からみて前二者の可能性が強い。ここまで年代が絞り込めた遺物は鹿田遺跡では初めてであり、貴重。内容は「金阿禪門」のなんらかの仏事に関するもので、その菩提か逆修のため供養法楽を行なったことを記したものであろう。

なお、これらの判読作業は今津勝紀氏と共同で行ない、一部、狩野久氏の教示を得た。

9 関係文献

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター『岡山大学構内遺跡調査研究年報』一六(二〇〇〇年)

同『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報』二三(二〇〇〇年)
(1) 7 山本悦世、8 久野修義(岡山大学)

